

書評

五百旗頭真・中西寛編

『高坂正堯と戦後日本』（中央公論新社、2016年）

Iokibe & Nakanishi (eds.) 2016 KOSAKA Masataka and the post war Japan (in Japanese),
Chuokoron-shinsha.

谷口裕久*

TANIGUCHI Yasuhisa

キーワード:高坂正堯(KOSAKA Masataka)、アメリカ(United States of America)、カント(I. Kant)、国際政治学(International Politics)

『高坂正堯と戦後日本』は、2011年～13年まで京都大学出身者を中心に組織されていた「高坂正堯研究会」（代表：細谷雄一・慶應義塾大学教授）の成果である。著者は上記研究会の参加者で、森田吉彦（本学国際交流学部 以下、文中すべて敬称略）を含む計11名である。第一部の論文と第二部の基調報告より成り、構成は以下の通りである。

はしがき 中西寛

〈第一部〉序章 五百旗頭真「高坂正堯の戦後日本」

第一章 細谷雄一「外交史家としての高坂正堯－『歴史散歩』をする政治学者」

第二章 荻部直「『現実主義者』の誕生」

第三章 待島聡史「社会科学者としての高坂正堯－1960年代におけるアメリカ学派」

第四章 森田吉彦「高坂正堯の中国論」

第五章 簗原俊洋「高坂正堯のアメリカ観－その『多様性』と『復元力』に魅せられて」

第六章 武田徹「二つのメディア変革期と高坂正堯」

第七章 中西寛「権力政治のアンチノミー－高坂正堯の日本外交論」

〈第二部〉一 猪木武徳「高坂先生の思い出と『一億の日本人』」

二 入江昭「半世紀前のハーヴァード、知識人の小さな共同体」

三 田原総一郎「『サンデープロジェクト』時代の高坂さん」

高坂正堯（こうさか まさたか、1934-1996）は長年、京都大学で教鞭をとった著名な国際政治学者である。

一般的にみて、社会への貢献度が高かった偉人の伝記が没後出版される例はままあるが、鬼籍に入った後20年を経た人物やその人の研究回顧が新しく出版されるのはまれである。

評者は大学院の一時期に、ある内閣のブレンだった政治学者の「国際関係論」を受講した。考え方は好みではなかったけれども、一国の政策科学のあるべき姿は、国際関係の力の駆け引きの過程で発揮される、研ぎ澄まされたスマートさに根ざすことを思い知らされた。本書の読了感はそのときの印象に似ている。

書評の対象書籍とは別に、手許に一冊の本がある。高坂正堯著『平和と危機の構造－ポスト冷戦の国際政治』（1995年、日本放送出版協会）である。評者は出版直後に入手し、それを参考にした。1980年代～21世紀初頭にかけて「宗教紛争」や「民族紛争」と呼ばれた、実態の不明確な紛争や内戦が旧ユーゴスラビアやルワンダ・スリランカなどの各地で発生していたからである。この書で高坂は93年に刊行された米・政治学者ハンティントンの「文明の衝突」論に批判を加えている¹⁾。異なる宗教文明が一義的な紛争要因となり衝突するという対立

*大阪観光大学国際交流学部

のモデルは2001年の米・同時多発テロ事件以降、改めて注目を浴びた。評者の専門分野である文化人類学でも批判的に捉えられる論だが、さっそく高坂はそれを題材にし、論点のひとつにしていたのである。

ここであえてハンティントンを引き合いに出すまでもない。京都大学では戦前・戦後に気鋭の学者が集まり、「京都学派」が形成されていた。高坂正堯の父・近代西洋哲学者の高坂正顕（こうさか まさあき）もそのなかの一人であり、多様な場で人文科学や社会科学などの広範な研究が進められていた。そもそもそうした研究の土壌に高坂自身も慣れていたのであろう。彼の先の書にしても、新奇さを取り入れる先進性と、共通する闊達な学問的心性の傾向が強く認められる。

彼は研究の初期の段階で、ヨーロッパの保守体制を決定づけた19世紀の「ウィーン会議」の分析を行っている（第一章 細谷稿 27-52頁）。当初、ヨーロッパの歴史的な外交モデルの分析に傾斜し、後に渡米して研究をつづけた。アメリカの外交をはじめとする政治的な動きに対しては、渡米後も疑念を抱いていたのだろう。細谷によると、高坂政治学の原型は、高坂が愛着を感じたヨーロッパの多様性に基づく勢力均衡モデルに見いだせるという（細谷稿 43-47頁）。事実、民族的・宗教的多様性を容認する傾向は、オーストリアやロシア、オスマン帝国など19世紀のヨーロッパで認められた²⁾。

果たして彼は1960年2月から2年間ハーバード大学（入江稿では「ハーヴァード」と表記）に研究員として赴く。しかし、「それはもっぱら財政的理由によるものであり、アメリカでの研究生活には馴染めないものを感じていた」（第三章 待島稿 77頁）。第三章では、「アメリカでの在外研究自体が意外なことだと見るべきかもしれない。—中略— 高坂の十九世紀ヨーロッパ外交に対する深い造詣と思い入れを示しているのに対して、彼のアメリカへの視線には批判的な要素が含まれている」（同上 77頁）と記されている。「高坂は自身のことをアメリカの専門家、あるいはアメリカについての研究者だと一度も考えておらず、実際にもアメリカの政治や外交について体系的に深く学んだわけではなかった」（第五章 箕原稿 155頁）ともある。これらの指摘は、高坂をアメリカ研究者の一人と「誤認」していた評者には意外な新鮮さがあつた。

第二部 二の入江稿（249-266頁）では、1962年の在米時の交流が入江と高坂の共通の経験に基づいて記されている。「五〇年前にはグローバリゼーションということばも概念も存在しなかった」（入江稿 264頁）とい

うが、いわばアメリカ中心の近代化理論しかなく、まだ「ブラック・パワー」の運動すらなかった時代である。60年安保闘争があり、東西陣営の対立が強調されていたこの時代に、ハーバード大学で彼は経験値を高めた。

いずれにせよ高坂の学問的基盤は、この時期に形成されたと言ってよい。彼は晩年の95年～96年にかけて、日本政府の改憲論や謝罪論（その不要性）にも言及するのだが³⁾、彼の言説は教条主義的で凝り固まってはならず、むしろ柔軟だった。

五百旗頭が「理想主義者」・「モラリスト」・「愛国者」と呼んだ高坂（序章 五百旗頭稿 3-26頁）を、中西寛は「リアリスト」とも呼ぶ（第七章 189-228頁）。その実態は苅部稿（第二章 53-72頁）に詳しく、そこでは彼の哲学志向に触れている。正堯の父・正顕はカント学者で、イマヌエル・カント（1724-1804）の『永遠平和のために』を初めて邦訳した人物である。正堯の実弟・節三の著でも、父子の絆の強さが確認できるが⁴⁾、正堯のカント理論に対する関心は高く、踏み込んだ解釈を行っているという（苅部稿 65頁）。カントは普遍的な真理の探究を、現実との調和ならびに真理追究の過程やその結果に帰結させるのだが、カントのリベラリズムは非功利主義的な中立性に重きを置き、そのヒューマニズムは理性の自律性に基礎を置いていた。総じて言うと、高坂の論考はカント的な敷衍を経た、理論と現実とのバランスを基礎に想起されたものだった。高坂自身も歴史性や多様性を見極める能力を持ち（細谷稿 41-44頁）、理論と実践感覚とを兼ね備えた、応用の利く学者だった（待島稿 88-89頁）。

しかしながら、森田が指摘するように（第四章 101-129頁）、その高坂といえども中国の政治や外交の行く末は予見できなかった。72年、ニクソンによる米中の和解を同様に予測できなかった点についても高坂は反省したとされる（猪木稿 245頁）。90年代前半、中国共産党は本来相反する原理を合一して「社会主義市場経済」を発明した。それを契機に急激な変革を中国社会にもたらし、そして経済・軍事大国となった。70年代の地政学的な高坂の理論武装（森田稿 118-120頁）だけでは、中国の現状には太刀打ちできない。中国を矮小化するという解釈は、日中の国交正常化があつたにせよ、この時点では無理もない。人民服に『毛沢東語録』、人民公社的な集団主義の時代から思えば、同じ一党独裁型であっても半世紀ほど先にある今の中国は想像の埒外にある。

武田稿（第六章 161-188頁）や田原稿（第二部三

267-285 頁) が触れているが、高坂はテレビ出演によってお茶の間でも人気を博した。評者も高坂の顔を週末のテレビ番組に見つけていた者の一人である。出演は 1989 年より没する 96 年にかけての長丁場で、とくに 89 年は「論壇メディア・放送メディアの転換期であった」とされる(武田稿 161 頁)。ジャーナリズムや放送メディアにおける立ち位置など、悩みはあったのだろうが、高坂は柔和な顔で 223 回に渡り視聴者に語りかけた⁵⁾。まったりとした京都弁の語り口は親しみやすく、碩学の知識人然としていた。

さて、本書は総合的な「高坂正堯研究」である。そのために論文・評論集という体裁で編集されている。誤解を恐れずに言えば、本書では著者である研究者や評論家がそれぞれに没後 20 年の「高坂論」を提供していて、読者にピンポイントの持論を呈示したに過ぎない。その点で各論考の連関が分かりづらくなっている。したがって、彼自身が過去の思想家や歴史家・同時代の研究者の思想ならびに一定の時期の社会思潮や理論をどう評価していたのかは本書のみでは不明確で、隔靴搔痒の感が残る⁶⁾。

また、本書で示される人物名には名だたる学者や政治家・評論家・外交官・ジャーナリスト等の著名人が多数認められる。本文では丸山眞男との深い間柄が描写されている(入江稿 253-254 頁)。それ以外にも三島由紀夫や永井陽之助(政治学者)、坂本義和(政治学者)、塩野七生(作家=イタリア歴史文学)らの名が挙がっている⁷⁾。上記以外の周囲の多くの人物を含め、高坂と所縁のあった人々はいったい彼とどのような交流をし、いかなる議論が交わされ、それが高坂の思惟にどのような影響を与えたのか、興味深いのが本書だけでは判然としない。もっともこれらの点は、前者に関しては『高坂正堯著作集』(全 8 巻、1998-2000 年、都市出版)などを、後者に関しては弟の著書(補注 4 の文献)などを本書と同時に参照すれば、ある程度まで補完できるが。

ところで、昨年 5 月にはオバマ米大統領が被爆地の広島を初訪問した。一方、北朝鮮・朝鮮民主主義人民共和国の核の懸念は日に日に募り、彼の国は弾道ミサイルを撃っては国際社会を脅かし続けている。中国艦の航行が確認された尖閣諸島の近海は、日中双方の海洋開発の拠点でもあり、「海洋国家日本」のホット・スポットである。台湾では「台独(台湾独立運動)」の動きがくすぶるなかで新政権が誕生した。南シナ海では中国が環礁を埋め立てて領有権を主張し、周辺諸国等を巻き込んだ安全保障問題に発展している。近年、我が国では政権者

が度々変わり、集団的自衛権の解釈変更が行われて、改憲への道を歩み始めた。日米地位協定の見直し論が再燃したのは、昨年の沖縄での米人軍属による女性遺棄事件以降である。アメリカでは、高坂が言及した「パパブッシュ」や、イラク戦争を始めたその息子が政権を担った時代は遠に過ぎ、昨秋 45 代目の新大統領が選出された。そのアメリカは今やホーム・グロウン・テロに頭を悩ませる。イギリスは拮抗した国民投票の結果、EU 離脱を決め、EU 自体が一大転換点を迎えた。高坂は 90 年の湾岸戦争の際に、曖昧な立場の日本人を咎めたという(五百旗頭稿 22 頁)。国際政治学者・高坂正堯が健在だったなら、21 世紀の今の国際社会や国際政治の現状を、また日本人の思考や日本政府の対応を、どう断じただろうか。

今世紀の、政治的に一層複雑化する状況下で、やはり有効なのは、高坂が体現した「国際社会における弁証(論)法的かつ形而上学的な関係論の考察」である。これは単なる哲学への仮託ではなく、歴史的に東洋世界も西洋世界をも既知とした邦人研究者の政治学的な分析方法のひとつなのだ。「はしがき」で中西は「高坂先生の洞察の奥深さははるかに汲みつくされていない。」(3 頁)と謙遜を込めて述べているが、確かに 1950 年代後半～96 年の死の直前まで、進取性に富んだ多くの論考を高坂自身が著しつづけた事実は、読者に重くのしかかる。

本書は彼の研究史の一角を照らしつつ、彼の研究者としての存在意義や、研究上のエッセンスも再認識させてくれる書である。同時に 21 世紀前半の国際政治学の指針も暗示する。「高坂正堯研究」の一環をなすこの記念碑的な書が深い意義を持つ以上、待つばかりであるのは、本書や高坂の研究を基礎にした、洗練された若手国際政治学者ならびに文明学者の出現とその台頭である。

2016 年 5 月刊、A5 判
286 頁、本体価格 2,000 円 + 税

【補注】

- 1) 当該部分は 316-318 頁。ハンティントン論の論文は、Hungtington, S. P. 1993 "Crash of Civilizations?", *Foreign Affairs*, Vol.72, N.3 (Summer Issue), pp.22-49 所収。邦訳は 93 年 8 月号の『中央公論』に掲載された。
- 2) 論文では、服部 裕 1996 「多様性のなかのヨーロッパ近代-比較文化論の試み」『秋田大学総合基礎教育紀要』第 3 集 64-74 頁。さらに指摘すると、18 世紀のヨーロッパ貴族の間では国家や民族を越えた交流が見られ

- た。19世紀のバルカン半島では典型的な民族対立があったが、国民国家を離脱した「難民」が現れ、その問題が具体化するの、とりわけ第二次世界大戦後である。
- 3) 高坂正堯「思考停止をやめ明確な回答を」『季刊アステイオン』1995年夏号などを参照されたい。
 - 4) 高坂節三 2000『昭和の宿命を見つめた眼-父・高坂正顕と兄・高坂正堯』PHP 研究所。
 - 5) ウェブサイト「高野孟のラジオ万華鏡」[2010年3月6・7日、ザ・対談『田原総一郎』さん](<http://www2.jfn.co.jp/blog/people/2010/03/>)、2016年10月26日閲覧。
 - 6) その対象を列記すれば、孫文（の大アジア主義講演）、毛沢東、ホーチミン、アルビン・トフラーやエズラ・ボーゲル、エドウィン・ライシャワー、ドミノ理論やパクス・アメリカーナ、従属理論や世界システム論、グローバリゼーションやポストコロニアリズム、テロリズムやポピュリズム等々である。
 - 7) 塩野七生は「追悼、高坂正堯 五十歳になったらローマ史を競作する約束だった」(『文藝春秋』96年12月号)を記し、それを高坂に関する別の一編とともに著書『想いの軌跡 1975-2012』(2012年、新潮社)に再掲している。